

正倉院の宝物はどこから来たか

長野県飯田市立松尾小学校 野口隆徳

1 はじめに

子どもたちにとって「遣唐使がもたらした大陸の文化」の「大陸」とはどのようなイメージなのだろうか。そこは日本からどれくらい遠いのだろう。また、どのような気候で、どれくらいの広さがあり、どんな人々が住んでいるのだろうか。

歴史学習の中でも、はじめて広く諸外国とのつながりが現れるこの場面で、地図を活用することによって、イメージをよりふくらませることはできないかと考え、次のような学習を考えた。

2 宝物のふるさとを知る

はじめに東大寺正倉院の宝物を写真で紹介したあと、これらは日本で作られた物ではないことを説明すると子どもたちは、これまでも「邪馬台国」や「遣隋使」の学習で、日本と中国のつながりが強かったことを学んでいるので、これらも当然中国で作られた物であると考えただろう。もちろん、中国で作られた物もあるが、その材料やデザインが「アフガニスタン」や「インド」「西アジア(イラン・イラク周辺)」からのものであることを知ると、それはどこなのか知ろうとするのではないかな。

地図帳(最新版)のp.47～48の「日本の近隣



帝国書院「小学生の地図帳」(最新版) P.47-48

諸国とアジア」を開くと、子どもたちは多くの情報とイメージを得ることができる。まずは日本の約25倍もある中国の広さである。その中国とインドの間には世界最高峰のエベレスト山(チョモランマ)があるヒマラヤ山脈がそびえている。アフガニスタンから中国に入るためには、本州の半分ほどもある広大なタクラマカン砂漠を通り抜けねばならない。この中国西域はまた、「西遊記」の舞台でもある。西アジアは「シンドバッドの冒険」の舞台であり、そこは現在も紛争が収まらないイラクである。そして、これらの地域をつなぐ長い道を「シルクロード」という。このシルクロードは、海を渡り、日本の近畿地方を終着点にしていることがわかる。

このページを開くだけで、砂漠や雪山といった厳しい自然の中を黙々と歩いた人々によって、これらの宝物が日本にもたらされたことに子どもたちは気づいていくことだろう。

3 そして日本へ

このようにして多くの人々の手を渡り、長い時間をかけてこれらの宝物が日本にたどり着いたことを知った子どもたちは「なぜ、そんな大変な思いまでして人々は宝物を運んだのだろう」という課題をもつのではないかな。

このルートの困難な点を改めて考えさせると、砂漠や雪山の他に、海を渡ることも当時としては大変危険なことだったのではないかなという考えに及ぶだろう。そこから、遣唐使が命がけで中国にわたったり、鑑真が失明してまで日本をめざしたりした理由を考えることができる。

地図帳の中からさまざまな発見をした子どもたちが、調べて考える学習過程を通して、その当時の人々の考えやおかれた状況を、具体的なイメージをもって追究することができるよ。百人一首に親しんできた子どもたちには、学習の最後に阿倍仲麻呂の歌の意味を改めて伝えてみたいとも考えている。